

札幌ひで おも劇場

街並みや暮らしの変遷とともに
大きな発展を遂げた昭和の札幌。
その一場面に居合わせた方に、
思い出の旅へと
案内してもらいましょう。

第三回 男子スピードスケート世界 選手権 一九五四(昭和二十九年)

今回のご案内役は………内藤 晋さん

大観衆を魅了した「銀盤の選手たち」 真のスポーツマンの姿が心に刻まれた

「東洋の氷で滑ってみた その機運が盛り上がった。大きい」。北欧選手のこの一言が、会后暫くして、ISUから札幌で世界選手権を開く切っ掛けになった。

一八八九(明治二十二年)、ポーツの振興が重要視されスピードスケート世界選手権大会がアムステルダム(オランダ)で初めて開かれてから永い歴史を誇っているが、開催地は北欧中心で、参加選手、役員たちにとっては新鮮味に欠け、どこか新しい所はないか—という空気が漂っていた。

そのようなとき、国際スケート連盟(ISU)から復帰を認められた日本が、十五年ぶりに一九五一(昭和二十六年)年男子スピードスケート世界選手権に出場したことで、



会場の円山競技場特設リンクでは、2万人の観衆が6カ国から集まった19人の選手に盛んな声援を送った

(市文化資料室所蔵)



病気のため選手ではなくトレーナーとして参加した内藤さん(右)。ノルウェーのアンデルセン選手(左)が体調を気遣ってくれた

(内藤晋氏所蔵)

らに周りの木々の落ち葉が飛んできて水面に付着する。夜間作業で疲れている係員が、スコップや小さいカンナで氷面の整備に追われた。

大会初日は暖気で、五千坪は夜間レースになった。前年のチャンピオン、ゴンチャレンコ(ソ連)の脚力を生かした強引な滑り、アンデルセンは北欧勢の一足一足しつかり氷をとらえる力強い洗練されたフォーム、新鋭シルコフ(ソ連)の軽快なピッチ走法と、対照的で面白かった。降りしきる雪の中で一万

選手中(一九五〇年から三年連続チャンピオン)の真剣なレース態度、浅坂選手(あさか)の果敢な奮戦ぶりが印象深い。円山競技場は連日超満員の観衆で埋まり、入場出来なかった人達は、カラスに代わって周囲の木によじ登り、高見の見物だった。レースが終わってシルコフ、ゴンチャレンコ、ゲリシンのソ連勢がリンク正面の台上で表彰された。月桂樹の輪を竹田会長からかけられたシルコフが台から下りるや、

待ち構えていたアンデルセン

が、新チャンピオンを同僚マイチンセンと肩車にのせて祝福した。憧れの的だった「氷の英雄」のこの行為に、真のスポーツマンの姿を見、深い感銘を覚えた。憧れの東洋の氷に刻んだトレースは消えても、かつての「銀盤の英雄」の残したこの行為は、市民の心に深く焼きついたことと思う。この大会の成功が、北海道のスケートの発展に大きく寄与した。

◆ ないとう すずむ

一九二二(大正十一年)年札幌市生まれ。一九五一(昭和二十六年)年男子スピードスケート世界選手権(スイス・ダボス)の五百メートルレースに、四十三秒の日本新記録で優勝。厚別区在住。